説明資料

流鏑馬とは奈良時代以前に５月５日の節句の日に宮中で行われた。
宴会の際に武徳殿前の馬場で近衛と兵衛の官人達に試練された騎射の様式を
武士達が継承したもので、馬を走らせながら馬上より的に矢を射る武技である。

広辞苑
馬上で矢継ぎ早に射る練習として、馳せながら鏑矢で的を射る射技である。
的は方板を串に挿んで３所に立て一人おのおの３的を射る平安末期から鎌倉
時代に武士の間で盛行した。現在は、神社などで儀式として挙行されている。

## 鹿島神社と奉射祭（流鏑馬）

小斎の鹿島神社に於いて、佐藤家が初めて奉射祭（流鏑馬）を行ったのは、佐藤家四代清信の時代の寛永２０年（１６６４）であると明治１０年改めの鹿島神社祭礼式記に書かれてある。小斎ではこの神事を流鏑馬と呼んでいるが、佐藤家文書並びに鹿島神社の文書（明治以降）には奉射又は奉射祭と書かれている。

※為信（初代）・勝信（二代）・実信（三代）・清信（四代）・易信（五代）～

**【鹿島神社…由来】**…貞観八年（８６６）には小斎に鹿島神社が祭られていた！

鹿島神社に関する古文書で小斎に残る最も古いものは、小斎清水の齋藤軍太氏宅にある齋藤家の系譜である。

齋藤家３１代 家仲のところには次のように書かれている。

> 家仲　齋藤軍太左衛門　小斎齋藤家７代目　当代柿内田初代
> 西舘城主小斎長門守の家老となる。
> 天文元年（１５３３）故ありて鹿島明神を再建立す。宮材木は残らず
> 軍太左衛門が寄進す。これ守護神を鎮めるに当たるなり。美作守に任ず。
> 天文廿二年九月廿四日卒

## 【カリガネの的】…（雁が音・雁金）

大的を射終わると今度は、直経約一尺程の「カリガネの的」と呼ばれる小的を射るのである。この的には北に向かって飛ぶ雁を描いているところからこう呼ばれていると思われる。この鳥は悪鳥なので射殺さない内は止めることが出来ないため当たる迄、何回も繰り返して射られたとの事である。

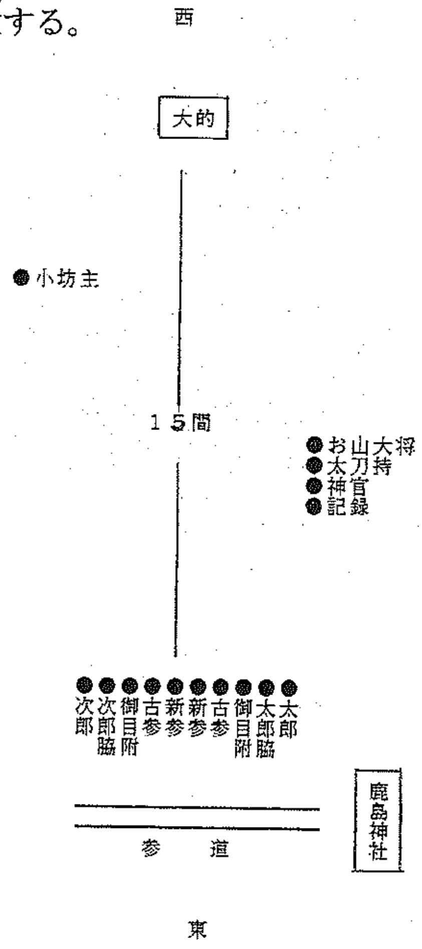
この的は小さく中々当たりにくいで地面をかすり乍らでも的に当たれば「ずり当たり」と称して当たった事にしたそうである。

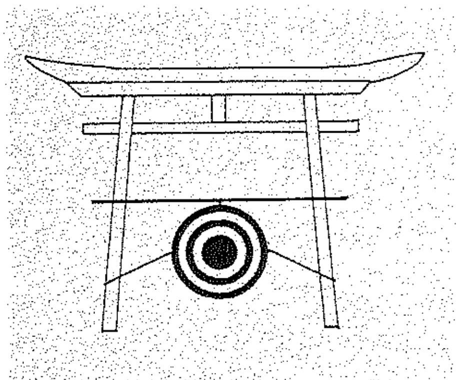
射終わって、お山大将から当日の射手に対して成績を書いた目録の授与があるが、この時には匍匐膝行してこれを受けることが礼とされている。

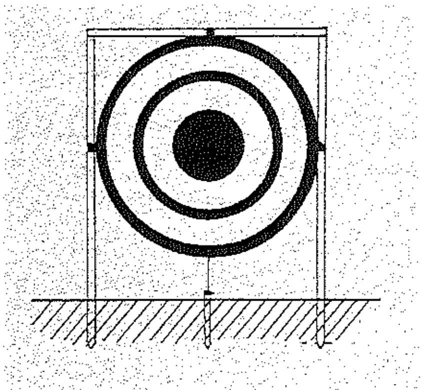
この神事が終わった後、精進上げをして解散する。

● 大的

午前八時頃になるとお山大将を先頭に十人の射手が神前に一礼して二の鳥居の西の境内に入り左の図のように片肌脱いだ姿で立って並ぶのである。





神の的


大的

大的の長さ五尺二寸　一メートル五八cm